

一般撮影時における照射野の絞りについて

| | |
|-------|-----------|
| 法人名 | 医療法人社団愛友会 |
| 病院名 | 金沢文庫病院 |
| 職種・所属 | 放射線科 |
| 発表者氏名 | 敦賀亮太 |

当院では、日本放射線技師会が認定している医療被ばく低減施設認定取得を目指している。医療被ばく低減施設とは、様々な医療被ばくにおける書面、訪問審査に合格した施設である。

現在、厚生労働省から電離放射線障害防止規則等の改正（定められた5年間の平均で20mSv/年、かついずれの1年においても50mSv/を超えない）やDRL2020では医療被ばくにおける最適化を定めており、診療放射線技師は医療被ばく低減に十分に努めていく必要がある。

一般撮影においてはCRからFPDへのX線検出器のデジタル化が進んできた事により、撮影時の被ばく量減少や繰り返し撮影が可能になってきた。

以前はCRで撮影を行い部位ごとによって異なる大きさの検出器（14×14inch, 10×12inchなど）を用いて撮影を行っていたが、FPDになり同一サイズの検出器（14×17inch）のみを用いて撮影を行い部位ごとに適宜サイズを変更して画像を送信している。

そこで、FPDによるデジタル化が進んできた事によりCR撮影時よりも照射野における正確性が下がっているのではないかと、FPDで送信する画像サイズよりも照射野の方が広く撮影が増えてきているのではないかと考えた。

この余分な照射野を適正な画像と担保した上で絞る事で患者の医療被ばく低減に繋がると考えられる。

そこで今回は撮影ごとに照射野を測定し、その値から入射表面線量を求めて記録を行う。

また、現在の照射野の大きさから放射線科内で絞りによる統一を図る事によって、より一層照射野を絞る事は可能かどうか検討し報告する。

得られる結果から照射野の絞りによる患者への線量減少によるメリットと引き起こされる再撮影等のデメリットを考慮し、当院における今後の照射野に対する指針を定めていく。今後は、TV室での検査における照射野でも検証を行う。